セッタンジェリ首藤あつき［画家］

Atsuki Shudoh Settangeli

DreamLabo 5000

DreamLabo 5000 が使えるこのタイミングでしか、
このクオリティで画集を作ることはできなかった。
それが未来に残っていくということが何よりもうれしい。

甲冑やしめ縄、書などのモチーフを通して、日本の高い精神性を作品に描き出す、画家・セッタンジェリ首藤あつきさん。画家という肩書きではあるものの、その表現領域は油絵具で描かれた絵画から、インスタレーションあるいは写真作品としての表現まで、多種多様の広がりを見せています。その活躍は海を越え、日本古来の心のありように共感をする、世界の要人からも高い評価を得ています。

2018年1月、首藤さんはこれまでに作り上げてきた作品のすべてを収録した画集『SAMURAI SPIRIT』を製作。そこには、「侍」の、そして「日本」の精神世界がDreamLabo 5000 によって精緻に描き出されています。この画集はどのように生まれ、いかにしてかたちを得たのか。企画や制作マネージメントを担当した株式会社将之介商店・杉山将之介さん、DreamLaboによる印刷と製本、加工を担当した石川特殊特急製本株式会社・石川幸二さんを交え、お話を伺いました。

―― 首藤さんが「侍」をテーマにした作品を作られるようになった経緯を教えてください。

首藤 ● 侍のシリーズを描く前は、ルネサンス風の宗教画や真言密教の世界を描いていたのですが、ニューヨークでオノ・ヨーコさんと弟の小野啓輔さんにお会いしたとき、「侍の世界を描いてはどうか」というアドバイスを受けたのです。欧米では真言密教の世界は伝わりにくいけれど、侍は日本の文化でも最たるもので、世界中の誰でも知っているからと。それが2010年のことです。

―― 「侍」をテーマで描き始めるにあたり、苦労された点はありましたか。

首藤 ● それはまったくありませんでした。真言密教も侍の精神性も極めて日本的なものでしたから。描くスタイルが違うだけで根本的な部分は同じものです。僕がマニアと言えるほど、侍が好きだったということもありますが。

「侍」を描くにあたり、武器ではなく防具をモチーフに選んだのは、そこに侍の武士道精神を感じたからです。ユニークな装飾が施された「変わり兜」というものがあるのですが、命を賭けて戦場に行くのにユニークなデザインの甲冑をまとう。死してなお心の余裕を残すという独特の精神性がそこにはあります。「人は一代、名は末代」というように、死に際を間違えず、死んだ後にも名前を永久に残せるだけの美しい死にざまをしなさいということですね。

―― 「侍」シリーズを描くなかで、新たな発見、気づきのようものはあったのでしょうか。

首藤 ● 本当の意味での“国際性”に気づくきっかけになったと思います。日本人が考える“国際性”と、本当の“国際性”とはまったく違うということです。いまの日本人が言う「インターナショナル」というのは、外国に倣うことだという意識がどこかにある。しかし、それはまったく逆で、外国人が日本に求める“国際性”は極めて日本的なものなのです。その最たるものが、侍文化であり、そこに宿る精神性だと考えています。侍シリーズを描くときには、外国人から見た目線であることを常に意識していますし、一方で同時に日本人である意識と両方の視座から見ている。だからあえて、日本画ではなく、西洋式の油絵の技法で描いているのです。

『SAMURAI SPIRIT』
画：セッタンジェリ首藤あつき
印刷・製本：石川特殊特急製本
仕様：上製本（W270×H270mm）、
刻印付き桐箱入り
用紙：光沢タイプ
販売価格：60,000円（特別版）、50,000円（通常版）

紅白の組紐に金の房があしらわれた特別版（左）と紅の組紐で結ばれた通常版（右）。特別版には画集のほか、首藤さんによる特典が付属する。画集はいずれもシリアルナンバー入り

桐箱にはトレードマークともに言えるしめ縄がレーザーで刻印されている（左）
表紙にはScodix Ultra Proによる盛り上げ箔加工が施されている
（中：通常版／右：特別版）

『SAMURAI SPIRIT』の中面。左上・左ページは侍シリーズの第一作目として描かれたもの。甲冑はそこにあるものを写し取ったかのようなリアリティを備えているが、すべて首藤さんによるオリジナルのデザイン。表現技法も油絵、写真、書などさまざまで、なかにはバッグに直接描かれたものも。いずれも静謐のうちに秘められた強靭な精神性が見事に描き出されており、DreamLaboによってその世界観は忠実に再現されている

―― 画集『SAMURAI SPIRIT』を作ることになった経緯を教えてください。

杉山 ● 私は特殊印刷を使った訪日外国人向けの商品を作っているのですが、「和」を表現できる方を探しているなかで、首藤さんの作品パンフレットを見る機会があったんです。衝撃を受けましたね。すぐに知人を通じて紹介をしてもらいました。DreamLaboのクオリティの高さはすでに知っていたので、このクオリティで首藤さんの画集が作れたらすばらしいものになるはずだと。首藤さんとともにDreamLaboをお持ちだった石川特殊特急製本を訪ねたところから、画集製作はとんとん拍子に進みました。

―― DreamLaboで出力された作品を見て、どのような印象を受けましたか。

首藤 ● 色の艶、光沢感が今まで見たことのないものでした。色味がとてもきれいに出ていますし、濁りがまったくない。いまの印刷技術はここまですごいのかと思いましたね。さらに印刷と比べてみると、彩度が高く、黒の発色も全然違う。

石川 ● 一般の印刷だとこうした深い黒はつぶれがちですし、ドライダウンでやや赤くなってしまうこともありますね。

首藤 ● 色描画もDreamLaboのほうが圧倒的に細かい。僕の絵のような細密描写は、出力で細部が出るか出ないかでまったく印象が変わってしまいますが、DreamLaboの、これだけのクオリティで印刷したものなら、画集というかたちのなかでも自分の絵が生きるということが証明された。そう思っています。

―― 紙は光沢タイプを採用されています。これはどのように選ばれたのでしょうか。

首藤 ● 好みだけでいえば、僕はラスターのほうが好きなんです。でも、最終的には最初に見たときの驚きを、画集を手に取ってくれる方にも届けたかったので光沢タイプを選択しました。

杉山 ● アーティストサイドに立って考えるならラスタータイプ、ビジネスサイドに立って考えるなら光沢タイプということですよね。そのうえで、首藤さんはビジネスの視点も持って、光沢タイプを選ばれた。DreamLaboの魅力を生かすうえでは、とても重要な選択だったと思います。

首藤 ● この画集の一番の魅力は、写真かと勘違いするほど精密に描かれていることだと思うんです。説明を受けないと絵だとわからない。それがアートとしてのフォト・リアリズムの一番のポイントですし、見る側は写真のような絵が人間が手で描いたということに感動するんですよね。

―― 出力で苦労された点などはありますか。色校正はどのように行なったのでしょうか。

石川 ● 出力に関しては、困ったことはなかったですね。データがちゃんとしていましたから、基本的にデータ通り、忠実に出して、指示に従って直すだけです。全体を見て違和感がないようにしたいと考えていました。

首藤 ● 僕自身、原画のよさと写真やプリントのよさは違うと考えていますから、画集では写真のぬめり感や色の艶、漆黒さが表現できているかを優先しています。

杉山 ● 実際、修正をしたのは5、6枚くらいですよね。修正したものも、一発OKでした。

―― 今回の画集『SAMURAI SPIRIT』を作り終えて感じた、DreamLaboの可能性について伺わせてください。

杉山 ● いまの印刷業界は全体的に苦しいと言われています。しかし、DreamLaboのような、最先端の印刷技術をうまく活用すれば、これだけクオリティの高いものが作れるということを証明できたと思っています。印刷ってまだまだ未来があるということを感じましたし、新たなマーケットも作ることができるのではないか。そう思います。

首藤 ● 画家にとって、公式の画集が出せるというのは大変名誉なことです。そこで僕がやらないといけないのは、1ミリでも高いクオリティを求めて製作すること。その結果として、この画集ができあがったことは自分にとってのひとつの区切りになったと思っています。DreamLaboというクオリティの高い技術が使えるこのタイミングでしか、かたちにできなかったものがこうして誕生し、未来に残るということが何よりもうれしいですね。

セッタンジェリ首藤あつき
Atsuki Shudoh Settangeli
画家

1968年東京生まれ。1995年画家としてデビュー以来、世界へ向けて活動。おもな作品所有者に、旧イタリア王国 皇太子殿下 エマニュエレ・フィルベルト・サヴォイア氏、第69代横綱 白鵬、第72代 横綱 稀勢の里、実業家スティーフン・グローバス氏、オロ・ビアンコCEO ジャコモ・ヴァレンティーニ氏、ヲウチ・ギャラリーなどがいる。

杉山将之介
Masanosuke Sugiyama
株式会社将之介商店
代表取締役

石川幸二
Koji Ishikawa
石川特殊特急製本株式会社
専務取締役
東京支店長